

## 6 林 業

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 下刈り方法</p> <p>(2) 作業の安全</p>	<p>(今月の作業ポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○下刈り方法</li> <li>○作業の安全</li> <li>○蜂対策</li> <li>○ダニ刺咬に関する留意事項</li> </ul> <p>下刈りは、植栽した造林木が一定の高さになるまでの間、周囲の雑草木によって被圧され、生長が抑制されるのを防ぐために雑草木を刈り払う作業である。一般的には、スギ・ヒノキでは5年間程度必要である。</p> <p>下刈りの時期は、雑草木が前年度の養分を使い果たすと同時にまだ今年の養分を蓄えていない時期に行うことが望ましく、年1回の場合は7月中旬から8月上旬、年2回の場合は6月下旬から7月上旬と8月中旬に行う。</p> <p>下刈りの省力化には、植栽木の周りだけを刈る「坪刈り」や植栽列に沿って刈る「筋刈り」という方法がある。また、大苗の植栽や成長の早い品種を植栽することによって、下刈り回数を減らす試みも行われている。</p> <p>熱中症の予防のためには、皆伐跡地などの日除けがない場所では、早朝の涼しい時間帯に作業するなどの工夫をすると良い。</p> <p>作業の際の進行方向は、斜面の下部から等高線に沿って進む。植栽木の誤伐を防ぐために、ビニールテープや竹杭などで目印をつけてから実行すると良い。</p> <p>下刈りには、刈払機がよく使われているが、作業中に刈刃に接触し被災する災害が多発しているため、以下の点に注意する必要がある。</p> <p>ア 刈払機は、振動の少ないもの、ハンドルまたはレバーが取り付けられているもの、安全装置を備えたものを使用する。</p> <p>イ 服装は、長袖長ズボン、滑りにくい履物、保護帽を正しく着用する。</p> <p>ウ 刈払時には、刈刃の前方左側1/3の部分を対象物に当てるようにする。また、かん木等を切る場合は、キックバックやすべりを起こしやすい刈刃正面及び右90°の位置を避けて、刃の前方</p>

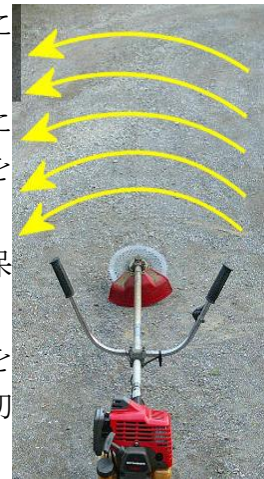
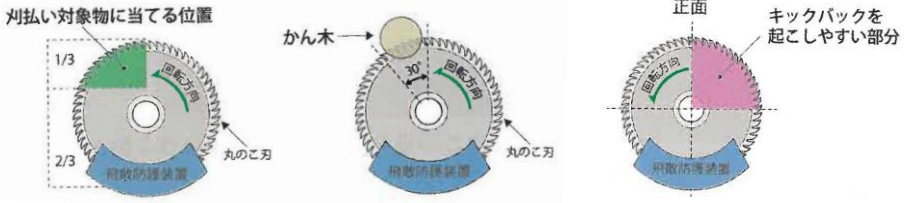


写真1 刈払機

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 蜂対策</p>	<p>左側の30°の部分を当てゆっくり切り込む（写真1、図1）。</p>  <p>図1 刈払時の注意点</p> <p>エ 刈刃等にからまった草、つる、小枝等を取り除くときや場所を変えるために移動するときは、必ずエンジンを止め、刈刃が止まったことを確認してから行う。</p> <p>オ 飛散防止装置（カバー）ははずさないようにし、すべりにくい靴を着用する他、必ず防護メガネを使用する。</p> <p>カ 急傾斜地では、谷側に向かって刈り進むことは避け、斜面を上側に向かって刈り進む。</p> <p>キ 刈払作業中は、飛散物で受傷することのないよう、作業員から5 m以内を危険区域とし、この区域内に他の作業員を立ち入らせないようにする。なお、安全な作業のためには、他の作業員と15 m以上離れて作業することが望ましい。</p> <p>ク 足場の悪い場所や急傾斜地では、鎌等の使用も検討する。</p> <p>スズメバチ等の蜂刺されにより全国で毎年死亡者が発生しており、令和6年の死亡者は18名となっている（林野庁HPより）。特にスズメバチについては、7月～10月が最も刺される危険性が高いと言われているが、ちょうど草が繁茂し、下刈りが必要な時期と重なる。</p> <p>スズメバチは黒い色に最も激しく反応し攻撃を加えるので、服装は白や銀色等の明るめの色のものを着用する。また、においも蜂を刺激するので化粧品等の使用は控える。</p> <p>蜂が近寄ってきたら静かに立ち止まり急に動き出さないようにするとともに、黒目に対して襲ってくるので目を細め、顔を下向き加減にしてじっとしていること。蜂を刺激しなければ、そのうち巣に帰るので、その後十分注意して静かに後退する。</p> <p>蜂の生息地に近寄るときは、防蜂網を着用するとともに、蜂専用のスプレー式殺虫剤を携行する。</p> <p>蜂刺されの恐れのある場所で作業する場合は、あらかじめ蜂アレルギーの検査又は診察を受け、重篤なアレルギー反応を起こす</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) ダニ刺咬に関する留意事項</p>	<p>恐れのある者は、自己注射器（エピペン）を携行するなどの対応をとる。</p> <p>もし蜂に刺されたら、速やかにその場から離れ、症状が軽い場合には、きれいな水で洗い流し、抗ヒスタミン軟膏を塗るようにする。</p> <p>蜂アレルギー体質者が刺され、アナフィラキシーショックが疑われる場合は、速やかに自己注射器を使用する。また、頸部や頭部等を刺された場合又は多くの蜂に刺された場合（症状が重い場合）は、一刻も早く医師の手当を受けるよう措置し、蜂毒の体内へのまわり方を遅らせるためにも、自力歩行は絶対にさせないようにする。</p> <p>蜂と並んで注意すべき生き物が「マダニ」である。マダニによる感染症は日本紅斑熱、ライム病、ダニ媒介性脳炎などが知られていたが、近年は「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」が報告されており、県内でも確認されている。SFTSは森林や草地等の屋外に生息するマダニのうちウイルスを保有する個体に咬まれることにより感染するので、マダニの活動が盛んな春から秋にかけては特に注意する必要がある。</p> <p>そのため、ダニに咬まれないように、作業服は袖締まりのよい長袖、裾締まりのよい長ズボン、足を完全に覆う靴を着用し、肌の露出を少なくすることが大切である（図2）。</p> <p>また、ダニ忌避剤の成分を含む虫除けを使用することや、野生動物等に直接接触しないようにすることも重要である。</p> <p>マダニは皮膚の柔らかいところに咬みつくので、作業終了時には服装（頭部、耳の中と後部、首の周り等を含む）を点検する（図3）。また、入浴時には脇の下や大腿内側、膝の後部などにマダニや刺咬痕がないか確認する。</p> <p>もしも刺咬中のマダニに気がついた場合は、手で潰したり、無理に引き抜こうとせず、皮膚科等の医療機関で処置を受ける。咬まれた後、数週間程度は体調の変化に注意し、発熱などの症状が</p>



図2 野外活動時の服装

項 目	作 業 内 容
	<p>認められた場合は、すぐに医療機関を受診する。</p> <p>(参考)</p> <div data-bbox="464 405 1362 763" data-label="Image"> </div> <p>図3 ダニ写真 (左：キマチダニの若虫、右：タカサゴキララマダニの若虫)  ※愛媛県 HP より</p>

(作成 林業研究センター)